

明治・大正期における早稲田大学雄弁会

伊 東 久 智

はじめに

一九〇二年の創立以来現在に至るまで、早稲田大学雄弁会（以下単に雄弁会と記す）は首相を含む数多くの政治家を輩出してきたことで知られる。しかしながら、というよりはそうであったがゆえに、雄弁会に対する歴史的アプローチの多くは、大物政治家の青年時代を遡及的にたどる政治ルポルタージュの類か、そうでなければ関係者の証言記録集といった形でのみなされる向きがあったことは否めない^①。そしてそうした諸成果がもたらしたイメージやエピソードの氾濫の前に、歴史的な実証研究は長らく二の足を踏んできた。

53

もとより本稿はそれらの諸成果を否定するものではなく、各時代における若者を担い手とする政治運動との関係性や、種々の活動を通じて形づくられていったと考えられる若者独自の政治文化など、いわば雄弁会の同時代史的意義

により重きを置きつつ、史料の読み直しを試みようとするものである。

実に一一〇年に達せんとする雄弁会史のなかでも、本稿が特に分析の対象に据えようとするのは、創立から大正末年に至る約二五年間である。結論を先取りしていえば、明治末年から大正前期にかけて確立された活動スタイルが、大正後期以降、明確に転換・変容していくまでの歴史をあらためてたどり直したい。いうまでもなく、その軌跡は東京専門学校から早稲田大学へと飛躍の一步を踏み出し、所謂早稲田騒動を経て、大学令に基づく私立大学としてその地位を踏み固めていった大学の歴史と分かちがたく結びついていた。

当該期の雄弁会研究には、早稲田大学史という枠を超えて、さらに次のような意義を認めることもできる。第一に、それは所謂日露戦後世代の非政治的イメージに対する典型的な反証事例としての意義を有している。従来この世代については、自由民権運動に端を発する「政治青年」に代わって、新たに「文学青年」ともいべき世代類型が台頭する、あるいは「天下国家」から「個性・自我」への志向性の転換、といった文脈をもって語られることが多かった。⁽²⁾

しかしながら、筆者は雄弁会がそのスタイルを確立していく日露戦後から大正前期にかけての時代に、旧来型の「政治青年」は民権期以来の政治文化を議会政治に即した形に Casting し、いわば新しい型の「政治青年」へと脱皮していくものと考えている。本稿では、雄弁会に集まった若者たちの実態を通じて、そうした仮説の立証を試みたい。

第二に、上記の点とも関連するが、雄弁会は当該期における若者の議院外政治運動——以下「院外青年」運動と呼ぶ——と密に連携しており、いわば人材の供給源としての役割を果たしていた。つまり雄弁会研究は、学生文化史的な範囲にとどまらず、政治運動研究に直結する広範な射程を備えているのである。そこで本稿では、雄弁会を内在的に把握しつつ、「院外青年」運動との関連性をも問うていきたい。

一 創立期の雄弁会（一九〇二～〇九年）

一八八三年三月、演説の修練と図書の収集を目的として、東京専門学校生徒黒川九馬らによって組織された同攻会の弁説部が雄弁会の前身であるといわれる。⁽⁴⁾しかし雄弁会創立の直接の契機となったのは、よく知られているように、足尾銅山の鉍毒問題を受けて生じた学生による救済運動である。

一九〇一年十二月二七日、東京専門学校生徒二八五名を含む「総数一千百有余」の学生が参加したとされる「学生鉍毒地大挙視察」が行われた。彼らはやがて学生鉍毒救済会を組織（翌年五月四日、青年修養会へと改組）。路傍演説をはじめとする一大キャンペーンを展開し、世論の喚起に努めた。そしてこの一連の運動を中心的に担ったのが、後に雄弁会を創設することとなる菊地茂、加々美治兵衛、佐藤千纏、高木来喜、永井柳太郎ら東京専門学校生徒たちであった。⁽⁵⁾

ここで確認しておくべきことは、学生鉍毒救済会（青年修養会）が都下各大学・専門学校の連合組織であった以上、例えば明治大学の大亦楠太郎などがその後同大学雄弁会の創設メンバーとなっているように、鉍毒救済運動から雄弁会（弁論部）へ、という動きは何も東京専門学校に限ったものではなく、むしろインターカレッジな傾向であったということである。さらに、この運動が警察との衝突を繰り返し、拘留者を続出させるすぐれて戦闘的な性格を有していたという点にも留意しておきたい。⁽⁶⁾

こうして一九〇二年二月三日、東京専門学校から改称したばかりの早稲田大学大講堂において、雄弁会の第一回例会が開催された。来会者は三百余名で、早速十数番の演説が披露されている。それは「政治、法律、教育、宗教殆

んど凡ての部面に於て雄弁の最も必要なるを感じ、之が要求に応ぜんとする為に弁舌の練習を目的」とするものとされ、初代会長には安部磯雄、幹事には佐藤千纏と高木来喜の両名が就任した。この時点から大正末年まで、史料から判明する限りの会長・幹事、例会等への出席者を一覧化したものが【表①】である。

ちなみにここで会員ではなく出席者とするのには意味がある。というのも、次に掲げるように、雄弁会には少なくとも大正期までは会員制度が存在しなかったからである。

この会には何の規定もなければ会員に制限もない、もう少し言ふと何の記録も無い。吾が雄弁会は唯不文律に依り、会長及幹事の自由裁量に依つて自由の活動を為し得る（然し之は専制主義を意味するものではない）。「中略」雄弁会実に此の如く自由なる悪く言へば不規律な会である。⁽⁸⁾

同会はいわば、核としての幹事を、常連出席者―非常連出席者―極端な場合は一回限りの出席者といったように、濃度を徐々に薄くする人的関係が取り囲む同心円構造を備えており、その外部には象徴としての会長と、後援者としての先輩校友〓〇Bが控えていた。この点は雄弁会の際立った特徴として強調しておきたい。

さて一九〇九年頃までの活動としては、毎週金曜日の夜に開かれた例会を軸に、公開演説会の開催、各大学・専門学校連合演説会（以下単に連合演説会と記す）や「早稲田議会」（擬国会）への参加などを確認することができる。以下例会、公開演説会、連合演説会の実態について簡単にみておきたい。

まず例会では、毎回一〇名前後の学生弁士が個別の論題を演じることとなっていたが、時には「拓殖会社設置の可否」などといった時局に応じた論題を設定し、二手に分かれて討論を行うこともあった。⁽⁹⁾ また例会とはいっても、弁士を務める学生ばかりが参加するのではなく、聴衆はもちろんのこと（後には近隣住民が傍聴に訪れることもあったとい⁽¹⁰⁾う）、しばしば招待弁士として教員や名士を招いており、会長の安部も時折参加した。

【表①】明治・大正期における早稲田大学雄弁会一覧

年	会長	幹事	例会・大会等への主な出席者(※)
1902	安部磯雄	高木来喜(03邦政)、佐藤千纒(03邦政)	石井佐助(03邦政)、菊地茂(05大政)、田村又六(03英政)、永井柳太郎(05大政)、宮崎清光(05専政)、山田顕義(03英政)、吉本庄次郎
1903		[不詳]	[不詳]
1904		[不詳]	加々美治兵衛(05専法)、五泉賢三(05大法)、佐伯俊雄、白松孝次郎、白柳武司(秀湖・07哲)、高田政平、馬場達郎(05大政)、比佐昌平(08大政)、舟崎仁一(06大法)、牧野賢三、安蔵吉次郎(06大法)、矢次熊雄(05大政)
1905		[不詳]	浅川保平(09大政)、井芹義志(07大政)、入井容、江尻恭平、大曲実形、岡崎靖規、小野義夫(05大法)、加藤九三郎、河岡英男(潮風・07専政)、木田孫一(06大政)、熊本捨治(07哲)、武部毅吉(07大政)、橘静二(08英文)、田中亀之助(06大政)、玉川保三(09英文)、中山善助、林癸未夫(05大法)、藤野善生(07大法)、保科孔治(06専政)、山田金一郎、吉田淳(09専政)、阮鑑光(清国留学生)
1906		[大野恭平(08大政)、田淵豊吉(08大政)]	安部暁生(06専政)、石橋貞男(10大政)、大平利八郎、桑原喜八、鈴木洸三郎、高谷英城(09哲)、田沼富三郎(13推薦校友)、中村直武、沼本謙三(08専法)、平内房次郎、藤原亮快(09専政)、益子運輔(08大政)、松岡佳文(09大政)、矢崎作平(09大法)、安本重治(08大政)、山道襄一(06大政)、山田堅齋、山田末一郎(07大政)、和田信次(09哲)
1907	[1907.3～08.10の間に交代]	[浅川保平、上井磯吉(09大文)]	大牛利一郎、小栗半平(07大商)、尾崎弘治(08大政)、金沢熊夫、桜内真郎、船越作一郎(07専政)、村岡清次(10大政)、山本昇造
1908		[不詳]	中村鶴(10大政)、早田耕捌、平沢貞曠(09大政・19英法)、宮沢胤勇(11大政)、山森利一(11大商)
1909	田中穂積	[不詳]	坂入順三、桜井兵五郎(11専政)、佐藤四郎(08大政)、栗山博(12大政)
1910		[不詳]	京田武男(11大政)
1911		宮沢胤勇、栗山博、山森利一	阿部磯治、栗屋薫(14大商)、石田弥太郎(12大政)、板倉元次郎、一町田東、市村貞造(11専政)、稲田直道(15大政)、稲葉浪三郎、井上英一(07高師法制)、江藤米市(03大政)、大木康孝(13大政)、大戸愿勝(12大政)、越智類次(14大政)、神村静孝(12大商)、神崎与五郎、北川亀三郎(13大商)、北沢平蔵(13大政)、児玉龍太郎(13大政)、後藤相三郎、五明忠一郎(13大政)、捧亦七(12専政)、佐竹勇一郎(12大政)、寒河江堅吾(13専政)、鈴木儀一、鈴木謙(14大商)、高須安一(12大法)、高広政之助(14大政)、竹内弥納、中沢権三、中野薫、中野林五郎、仲藤当雄(12専政)、中村敬三(1898邦政)、成田重郎、錦古里降太郎、野村秀雄(11大法)、芳賀栄造(12専政)、橋本徹馬(12専政中退)、浜田大吉(15大政)、坂東幸太郎(04邦政・11大政)、藤田平逸(15大商)、舟崎俊三、星島茂(15大商)、堀川直吉(14専政)、前田美稲(16大政)、松島刑部、森本一雄(15大政)、山下健造(12大商)、横関愛造(13専政)、横山季六郎、渡辺貴知郎(13大政)
1912		栗屋薫、稲田直道、大木康孝、江藤米市、北沢平蔵	石田善佐(17大政)、井村薫雄(15大政)、牛島政康、浦並夫(15専政)、遠藤民夫(17専政)、小笠原幸右衛門、小笠原星恨、尾崎義三郎(13大商)、織田照一(12専政)、寛守蔵(16

年	会長	幹事	例会・大会等への主な出席者(※)
			大政)、久我嘉平、来住静一、河野茂男(15専政)、堺忠七(1897邦政)、堺田顕次(16大政)、佐久間六(15大商)、真田武(12専政)、高木常七(16英法)、竹本喜平、田坂雁吉(15専政)、張徳秀(朝鮮独立運動家・16大政)、堤康次郎(13大政)、道正安次郎、豊田大誓(16史学)、長岡義雄(13大商)、永川俊美(16大政)、中島三郎(13大商)、野田英三(14大商)、橋本貞市(15大政)、長谷川光太郎(14大商)、花田半助(大政)、平塚豊次郎、藤田開三(17大政)、星野徳太郎(13専法)、松枝徳麿、松木良吉、三井晋、山内務(16大政)
1913		稲田直道、沖口圭介、舟崎俊三	[不詳]
1914		国田孝一、高木貞雄(17大政)、永川俊美、松枝徳麿	大溝啓三郎、神田寅之助(17大政)、菊池哲春(17大政)、木村貞男(大商)、金永建、佐藤醇造、杉本和雄、高木義平、中村秀雄、永井治雄、西岡竹次郎(16専法)、西川玄雄(16英文)、三浦力、森下政一(16大商)、山本専次郎
1915		菊池哲春、高木貞雄、丹尾磯之助(17専政)、西岡竹次郎	荒木章(18大政)、里兵衛門(17専政)、武谷甚太郎(23推薦校友)、瀧(森下)国雄(17専政)、永田次郎(大商)、無津呂一郎、吉永半平(16専法)
1916		荒木章、中村三之丞(18大政)、丹尾磯之助、松枝保二(18専政)	東四郎(16西哲)、池田清作(20大理)、池田直記(18英法)、上野寿(20大商)、内田繁隆(19専政)、大立目直武(20大政)、岡田隆文(20大商)、荻野巖(16専法)、尾崎士郎(19大政除籍)、小野義順(20大商)、海塚彦三郎(18専政)、影山金雄、雁住又朗(18専法)、小平米雄(16専法)、斎木政太郎(18大政)、桜井利一郎、佐々木修一郎(19大政)、笹村幸雄(20大商)、三文字一郎(20英法)、城崎久平(理工)、杉浦健之助(20大政)、須田勝馬、十河一三(20独法)、高橋円三郎(20大政)、中尾保(22理工建築)、中上義勝(20理工機械)、西谷清七、橋本求(18大政)、藤井仙吉(18大商)、本間勇吉(18専政)、松井通(17専政)、村上吉蔵(20大政)、茂木久平
1917		佐々木修一郎、田上友治、中村三之丞、松枝保二	大谷芳夫、神内正夫、重友毅、下村武士
1918		大立目直武、白石一一、須田斌一、高橋円三郎	浅沼稲次郎(22大政)、渥美鉄三(予政)、阿部勇(22大政)、石田芳春(21大商)、石戸徳之助(23独法)、伊藤唯男(予政)、伊藤唯一(祐一? 22大商)、入江弘(22大政)、岩本鼎(21大商)、太田金次郎(22独法)、桂剛輔(22推薦校友)、金井政弘(19専政)、喜多龍二郎(22大商)、木村盛(20大政)、小高良作(22大商)、斎藤孝平(19大政)、佐古英悦(19専政)、佐藤惣右衛門(予文)、篠崎茂男(予法)、白石一一(専政)、須田斌一(19大政)、高田末吉(19専政)、竹原利三郎(予政)、塚田一甫(22大政)、徳山鉄治(18専政)、長岡健作(21専政)、西村聡(22独法)、秦満(18専政)、平下清栄(19専法)、本田勇吉(専政)、三村浩三(大商)、最上勇(18専政)、森直継(予商)、山内隆一(22英法)、山口彦四郎(22大政)、山田倫吉(予商)
1919	[1919.5～22.6の間に交代]	芦刈末喜、大立目直武、木村盛、楠五郎、篠崎茂男、村上吉蔵	安達正太郎(23大商)、稲村隆一(22大政)、今西貢(24大商)、大西十寸男(21専政)、大村尚敏(20専政)、片田一徹(23英文)、加藤正男(22大政)、金島毅(予法)、亀井良夫(予商)、黒木勇吉(21専政)、坂上満寿雄(23専政)、品川寿夫(21専政)、信藤寛(20大商)、鈴木宇市(22大政)、須藤村助(22専

年	会長	幹事	例会・大会等への主な出席者(※)
			政)、瀧川聡文(23独法)、田畑磐門(24大政)、田原春次(21専法)、堤清之(大法)、角田耕一(予政)、壺井弘(20専政)、中尾幸哉(22大商)、中岡栄雄(23英法)、長田綱彦、中村高一(22大法)、並河渉(22大政)、野田武夫(22独法)、古田大次郎(大政)、村上忠彦(予商)、依田孟(21専政)、渡辺邦男(23大商)
1920		〔不詳〕	〔不詳〕
1921		〔浅沼稻次郎〕	西村吉太郎(大政)、平野力三(21専政)、堀川善雄(25英法)、三宅正一(22大政)、吉田実(22大政)
1922	大山郁夫	〔浅沼稻次郎、安達正太郎〕	飯塚康夫(22専政)、石塚一雄(23政)、乾鉄応(24大政)、牛田正憲(24大政)、岡部桂一(第二高等学院)、奥平稔(22大政)、木下矢五郎(24大政)、木村皓一(22大政)、小助川凱(22英法)、小林美樹雄(22専政)、酒井静夫(22専政)、酒枝義旗(高等学院)、重永昇(24大商)、島田義文(22大政)、高田敏雄(24専政)、田村勘次(23専政)、戸叶武(24専政)、中村雄二(18大商)、西村重次郎(25英法)、橋本源次郎、林達磨(23大政)、馬郡健次郎(24専政)、真野万穰(22専政)、森崎源吉(22大政)
1923		〔安達正太郎、戸叶武〕	原田稔(25大政)
1924		〔不詳〕	秋山宇之助(大政)、池田菊太郎(25専法)、加藤義重(専法)、北山亥四三(25専政)、橋本登美三郎(25政)、伏見武夫(専政)、古沢磯次郎(25専政)、松岡節子(例会に参加)、渡辺利太郎(26政)
1925		〔橋本登美三郎、渡辺利太郎〕	植田公男(正男ともあり)、大賀駿三
1926	二木保幾 〔就任年月 不詳〕	〔橋本登美三郎〕	伊藤栄、佐藤親次郎(28経)
(参考) 『五十周年記念出版 早稲田大学雄弁会』所収の名簿には記載があるが、史料上では確認できなかった人物(時代順)			馬場恒吾(09推薦校友)、牧山耕蔵(06大政)、平野英一郎(06大政)、杉山孝治郎、風見章(09大政)、阿部賢一(12大政)、朝倉慶友(06大政)、増本敏三郎(06大政)、中野正剛(09大政)、荒木孟(10大政)、石原善三郎(10専政)、大浦正三(09哲)、縫田栄四郎(10大政)、笹森順造(10大政)、高野清八郎(12専政)、石川安次郎、野間清治、星川豊彦、逢田武、多田満長(11大政)、喜多壮一郎(17英法)、和田巖(21大政)、伊藤武、降旗徳弥(22大商)、東舜栄(22大政)、川俣清音(22専法)、石川準十郎(23大政)、市村今朝蔵(22大政)、松尾茂樹(24社哲)、伊藤丑之助(24専政)、田所輝明、広島定吉(23大商)、鈴木公平(24専政)、稲岡進、隅井孝平、稲富稜人(24専政)、千田正(24大商)、伊藤隆文、吉川兼光、長谷部忠(25政)

※煩雑を避けるため、人名は史料上の初出年(必ずしも初参加年ではない)のみ記した。また、校友会名簿に記載のある人物については卒業年度西暦下2桁と学科(記載のない人物については判明する限りの学科のみ。なお、「大」は学部、「専」は専門部を示す)を付記した。

【出典】『早稲田学報』、『早稲田大学新聞』、『早稲田大学校友会名簿』、『雄弁』、『読売新聞』、『東京朝日新聞』及び『早稲田大学雄弁会100年史』(1906.07.21～23.25～26年幹事)の情報を総合した。

なお論題としては、雄弁会の活動が断続的に報道されはじめる一九〇六年以降の『早稲田学報』によれば、「実業熱と英雄論」（山田末一郎）、「宗教と人生」（田淵豊吉）、「道德思想の現状」（桑原喜八）など、どちらかといえば抽象的で、学術的、とりわけ比較論的なテーマが選択される傾向にあったようである。

こうして例会で鍛えた「舌」を発揮する舞台となったのが、毎年一回開催された公開演説会である。一九〇四年一月三〇日、神田錦輝館における第一回演説会では、菊地茂、牧野賢三、舟崎仁一、永井柳太郎、馬場達郎の五名が演壇に立ち、大隈重信や高田早苗らもそれぞれ弁を振るった。⁽¹¹⁾ こうした試みは明治末年まで継続したことが史料から確認できるが、一九〇七年三月一日には安部会長立ち会いのもと、その年の弁士を選抜する「決戦演説会」が開かれており、いわば「晴れ舞台」に立つ競争の存在を物語る。⁽¹²⁾

雄弁会出席者にはもう一つの「晴れ舞台」があった。連合演説会である。ここでその始原探しを試みるつもりはないが、日露戦後、一九〇七年頃から『読売新聞』や『早稲田学報』に報道記事が掲載されはじめている。⁽¹³⁾ この連合演説会には大きく二つの意義があった。第一に、雄弁会が他校弁論部と自らとを比較・対照し、そのスタイルを「発見」する場となったということ。「早稲田式」とも称された激越な悲憤慷慨調や「壇下の雄弁」と恐れられた痛烈な弥次。⁽¹⁴⁾ そうした雄弁会スタイルは、例えば淡々としながらも実際問題に秀でた慶應義塾、文学的で情緒に富んだ第一高等学校など、それぞれのスタイルを有する各校としのぎを削るなかで見出され、上塗りされていったものと考えられる。

第二に、連合演説会はそうした学校同士の「横のつながり」の結節点となった。一九〇七年二月八日、つまりは連合演説会が開始されてほどなく、各大学・専門学校の弁論部有志が丁未倶楽部という団体を組織している。それは当初、連合演説会参加者が親睦を深めることを主たる目的としていたようだが、やがて院外における政治運動へと驥

足を伸ばしはじめる。以下は粟山博（一九二一年雄弁会幹事）の回想である。

だいたい十年前から各大学、専門学校の学生の連合演説会があったわけで、それらの人の中から丁未倶楽部が結成され、私らになつてから社会運動に入つちやつたんですね。白瀬中尉の南極探検を応援する、山本内閣打倒とかね。芦田（均）さんなんかのやつておられたお上品な時代から、私達の時代になつて、多少荒っぽいものに変化したのですよ。⁽¹⁵⁾

つまり粟山の時代に至つて、丁未倶楽部に象徴される学生弁論界の主流が、「お上品な」学生文化の枠を超え、「荒っぽい」政治運動の担い手へと変貌を遂げていったというのである。丁未倶楽部に集まった学生たちについて、猪野毛利栄（一九二一年日本大学卒業）は「大方皆三十歳の年齢が来たら議政壇上に立たうとの考へらしかつたです」⁽¹⁶⁾と証言しているが、事実【表②】に示すように、同倶楽部への参加が確認できる早稲田大学出身者三三名のうち、実に一四名までが後に代議士となっている。そして彼らこそ、次章で扱う雄弁会黄金時代の立て役者なのである。

最後に、以上の議論を人員の変化（それは世代の変化と概ね対応している）と絡ませつつ整理しておこう。この一九〇二年から〇九年までをここで創定期と呼ぶならば、それはさらに以下の三段階に区切ることが可能である。まず創設メンバーである菊地茂、佐藤千纏、高木来喜、永井柳太郎らは、鉅毒問題への取り組みや総選挙における応援活動などを通じて、拘留をも辞さない激しい政治性を発揮した。雄弁会はそうした足跡の一つの結晶として位置づけることができる。彼らは一九〇五年を前後して一斉に大学を卒業する。

代わつて登場してくるのが、浅川保平、石橋貞男、井芹継志、大野恭平、田淵豊吉、比佐昌平といった者たちである。彼らの時代には「晴れ舞台」への選抜がすでに開始されており、いわば実力主義によつて幹事及びそれを圍繞するコア・メンバーが固定化されていったものと推察されるが、創設メンバーと比較する時には学術的な色彩が濃い。粟山のいう「お上品な」時代である。なお、彼らの卒業とほぼ時を同じくして安部は会長を退き、田中穂積が第二代

【表②】 丁未倶楽部への参加を確認できる早稲田大学出身者

人名	生年	卒業年次・その後の略歴等
浅川保平	—	1909年大政卒、報知新聞記者、東京市会議員
井芹継志	1881	1907年大法卒、東京日日新聞記者
稲田直道	1889	1915年大政卒、1937年代議士(政友)
猪俣勲	—	1916年推薦校友、都新聞記者
大木康孝	1889	1913年大政卒、日清生命保険台湾支社長
大野恭平	1888	1908年大政卒、帝国金属工業取締役
岡田和四郎	—	1923年推薦校友、陸軍砲兵少佐
北沢平蔵	1890	1913年大政卒、松坂屋取締役
京田武男	1889	1911年大政卒、東京日日新聞記者
後藤鉦直	1891	1921年推薦校友、帝国金属工業取締役
五明忠一郎	—	1913年大政卒、社会教育家
桜井兵五郎	1880	1911年專政卒、1915年代議士(同志→民政)
清水留三郎	1883	1902年邦法卒、1920年代議士(憲政→民政)
鈴木謙	1891	1914年大商卒、台湾綿花取締役兼支配人
高木貞雄	—	1917年大政卒
高野清八郎	1886	1912年專政卒、1924年全国立憲青年同志会結成
高橋円三郎	1894	1920年大政卒、1937年代議士(政友)
武谷甚太郎	1892	專政中退(推薦校友)、1930年代議士(民政)
田淵豊吉	1882	1908年大政卒、1920年代議士(憲政→無所属)
内藤隆	1893	大政中退(推薦校友)、日大法文中退、1949年代議士(民自→自民)
中村三之丞	1894	1918年大政卒、1939年代議士(民政)
丹尾磯之助	1891	1917年專政卒、早大評議員
西岡竹次郎	1890	1916年専法卒、1924年代議士(中正倶楽部→政友)
野村秀雄	1888	1911年大法卒、東京朝日新聞記者
長谷川光太郎	1888	1914年大商卒、国民新聞主筆、東京証券団理事
比佐昌平	1884	1908年大政卒、1924年代議士(憲政→民政)
堀川直吉	—	1914年專政卒、青年改造連盟常任幹事
益子逞輔	1885	1908年大政卒、大成火災海上保険常務取締役
宮澤胤勇	1887	1911年大政卒、1930年代議士(民政)
粟山博	1884	1912年大政卒、1920年代議士(憲政→民政)
森下(瀧)国雄	1896	1917年專政卒、1936年代議士(民政)
山森利一	1889	1911年大商卒、1936年代議士(民政)
吉田淳	1884	1909年專政卒、大阪朝日新聞記者、東亜問題調査会幹事

【出典】「明治四十年結成 丁未倶楽部名簿」(季武嘉也『大正期の政治構造』吉川弘文館、1998年、172頁／有馬学『日本の近代4 「国際化」の中の帝国日本』中央公論新社、1999年、27頁)に、『雄弁』、『読売新聞』、『東京朝日新聞』、『早稲田学報』、『早稲田大学校友会会員名簿』、『早稲田大学紳士録』等の情報を追補した。

の会長に就任している¹⁷⁾。

そして第三段階、一九〇八年から〇九年にかけて史料上に登場してくる大木康孝、桜井兵五郎、宮沢胤勇、粟山博、山森利一ら。彼らの多くは政治家となることを夢み、前世代が拵えた雄弁会、そして丁未倶楽部に(再び)政治性を吹き込んだ。

ところでここで名前を挙げた人物たちは、いずれも幹事あるいはコア・メンバーであったが、その多くが寄宿舎生であったという事実についてはほとんど知られていない。早稲田大学寄宿舎は一九〇四年二月に開舎式が挙行され（旧寄宿舎を廃止し、鶴巻町に移転したもの）、翌月には舎生会、さらに九月までにはその下部組織が整理される形で修養部と運動部とが設置されている。「修養部ハ品性ノ修養及相互ノ和親ヲ主トシ併セテ弁舌ノ習練ヲ計リ毎月一回演説会又ハ懇話会ヲ開ク」とあるように、舎生会修養部はその実、寄宿舎内雄弁会としての性格を備えていた。¹⁸しかも興味深いことは、寄宿舎の最盛期が雄弁会と同じ「明治」四十年以後の数年間¹⁹とされているという事実である。

少なくとも浅川保平、大野恭平、河岡英男（潮風）、松岡佳文、山森利一といった雄弁会出席者は同時に修養部員でもあったし、井芹継志、大木康孝、栗山博らも寄宿舎生であったことが史料から裏づけられる。²⁰つまり彼らは雄弁会を離れても寝食・行動をともし、かつ演説の修練に励んでいたのである。

あえて会員制を採らなかった雄弁会は、自由と引き替えに求心力喪失の可能性と絶えず直面していたといえる。しかし少なくとも大正半ばに至るまで、そうした苦慮を窺わせる史料や証言はみられず、むしろ上がり調子の発展をつづけることができた。その背景として、筆者は寄宿舎との密接なつながりがあったものと考えている。つまり先に述べた雄弁会の人的構造、すなわち幹事という核から濃度を薄めつつ広がる同心円構造、そのグラデーションの「濃さ」を担保したもののこそ、寄宿舎が醸成する緊密な人間関係にはかならず、その意味において、雄弁会は単なるクラブ活動の域を超えて、深く「生活」に根を張っていたのである。

二 明治末期の雄弁会（一九一〇～一二二年）

一九一〇年二月、一大弁論ブームに火を付けることとなる雑誌『雄弁』（大日本雄弁会講談社発行）が創刊された。「雄弁衰へて正義衰ふ。雄弁は世の光りである」ではじまる有名な発刊の辞は、河岡潮風（雄弁会OB）の手になるものである。しかしそこに、「今や再び雄弁の時代は来らんとしつゝある」⁽²²⁾とも記されているという点については、若干の説明が必要であろう。

日露戦後から大正期にかけて生起したこの弁論ブームは、前章においてみたように、浮沈はあったが概ね学生の政治的活性化と軌を一にしていた。そこからこのブームを論じる者は、演説が流行し、若者が政治に奔走した過去、すなわち自由民権期を想起し、いわばその再来として彼らの活動を位置づけようとしたのである。そのためこの時代の弁論ブームは、現在、第二次弁論ブームとも呼ばれている。

そして『雄弁』の創刊からわずか一年後、「上は東大、京大及各高等学校私立大学を始め下中学に至る迄殆んど皆弁論部の設けあらざるなし」⁽²³⁾という状況が現出するのであるが、ここでは早稲田大学における弁論熱の高揚を伝える次の文章を掲げるにとどめておく。

これは筆者〔村島帰之・一九一四年大学部政治経済科卒〕の予科時代のことであるが、その時分には、十分の放課時間を利用して演説会を開いたものである。政府攻撃に口角泡を飛ばす人、議会の腐敗を罵る人、何れも二言目には日比谷原頭を叫ぶのであった。〔中略〕大気焔につひ弁士も油が乗り、聴衆も興に乗つて、教師の這入つて来たので初めて始業の鐘の鳴つたのに気が附くこともあった。⁽²⁴⁾

こうした雰囲気の中で、雄弁会が数多くの学生たちを惹きつけたことは想像にかたくないし、事実そうであった。以下、その活動を継続事業、新規事業の順にたどる。

例会の模様を報じた『早稲田学報』記事を一瞥してまず気づくのは、教員が多かった招待弁士の顔ぶれに変化が生じているということである。具体的には、茅原華山、黒岩周六、古島一雄、佐々木安五郎、西川光二郎、福本日南、藤原惟郭、村上濁浪など代議士及び新進のジャーナリストが目立ち始める。外向化しはじめた姿勢の一つの表現といえよう。

論題については、創立期以来の抽象的・学術的下地の上に、「非立憲的桂内閣」（高須安二）、「西園寺侯の蒙を啓く」（橋本徹馬）、「選挙法改正に就いて」（栗山博）などといった具体的・政治的論調がはつきりと彩りを添えはじめている。公開演説会・連合演説会も引き続き行われているが、特に後者については、都下各大学・専門学校主催のみならず、例えば京都府教育会主催あるいは中央新聞主催⁽²⁵⁾などといったように、主催者にバリエーションが生まれ、時には全国レベルの大会が催されるに至った。雄弁会はそれらに選りすぐりの弁士を派遣するとともに、都下各中学校連合演説会を立ち上げ、後進の指導にも当たっている⁽²⁶⁾。

さらに会内においてもしばしば懸賞演説会が行われるようになり、一等、二等、三等とランキングが発表されていることなどからも窺えるように⁽²⁷⁾、ブームを背景としたこの時期、弁論活動は自己主張の手段であると同時に、一種の競技スポーツとしての色彩も帯びはじめていた。

なお、五月前後に予餞会（卒業者の送別と新旧幹事の交代）、一〇月前後にその年の発会式という年度割りが定まるとともに、OBの例会等への参加が通例化するのもこの時代のことである。

新たな活動もはじまっている。夏季休暇を利用して開始された地方巡回講演は、その第一回が一九〇九年に行われ

【表③】夏季地方巡回講演

回数	年	巡回地	教員参加者	学生（OBを含む）参加者
第1回	1909	新潟、富山、大津、静岡	副島義一	佐藤四郎、田淵豊吉、比佐昌平、栗山博
第2回	1910	郡山、若松、福島、米沢、山形、鶴ヶ岡、酒田、秋田、弘前、青森、北海道、盛岡	杉山重義、副島義一	桜井兵五郎、比佐昌平、宮沢胤勇、栗山博、山森利一
第3回	1911	名古屋、大阪、神戸、姫路、岡山、広島、山口、馬関、門司、福岡、熊本、鹿児島、長崎、佐世保、佐賀	青柳篤恒、副島義一、平沼淑郎	大木康孝、神村静孝、佐竹勇一郎、野村秀雄、宮沢胤勇、栗山博、山森利一
第4回	1912	岐阜、大津、京都、尾道、呉、松山、今治、琴平、九亀、高松、徳島、和歌山、高野山、奈良、山田	青柳篤恒、副島義一、山崎直三	大木康孝、北沢平蔵、高須安一、芳賀栄造、栗山博
第5回	1913	静岡、浜松、豊橋、岡崎、長浜、福井、舞鶴、豊岡、城崎、鳥取、倉吉、境、米子、安来、松江、杵築、今市	平沼淑郎（途中離脱→内ヶ崎作三郎、中島半次郎合流）、松平康国	稲田直道、北沢平蔵（自費参加）、舟崎俊三、松枝徳麿

【出典】『早稲田学報』175、176、185、197、213、228、229の各号所載の報告記事より作成。なお、丹尾磯之助「早大雄弁会発展史（三）」（『雄弁』7巻7号、1916年6月1日）所載の情報とは若干の相違があるが、ここでは『早稲田学報』所載の情報のみを掲げた。

ているが、その後一三年まで計五回を数え、ほぼ全国を周りに尽くしている【表③】。参加者は幹事クラスの学生と大学の教員数名であったが、第五回巡回講演に際しては事前に弁士予選演説会（幹事採決により二六名から九名へ）、さらに決選演説会（会長採決により三名へ）が行われており、やはり厳しい競争があったことが分かる。²⁸⁾

以上が雄弁会としてのいわばフォーマルな活動とすれば、それとはやや性格を異にする運動も展開されている。

一つは、丁未倶楽部と連動しつつ進められた南極探検隊後援活動であり、いま一つは、第一一回総選挙（一九一二年五月一五日）に際しての「理想選挙」を掲げた候補者応援活動である。

白瀬南極探検隊を支援しようという運動が展開されたのは、一九一〇年秋頃から翌年夏にかけてのことである。早稲田大学における雄弁会主催の演説会には時に大隈総長（南極探検後援会会長）や高田学長も列席し、²⁹⁾ いわば全学的な運動としての性格を帯びていたが、それはすぐさま、学生弁論界を打って一丸とするキャンペーンへと発展を遂げ

ることとなる。一九一一年夏、丁未倶楽部は東北・北海道組及び山陽・山陰・北陸組に分かれて全国遊説を挙行し、「青年学生起つ」などとこぞって報じられた。⁽³⁰⁾この運動は鉅毒問題のような鋭い政治性を帯びたものではなかったが、丁未倶楽部という象徴的な組織を通じて、雄弁会と他校弁論部との「横のつながり」が生み出す世論喚起能力をはじめて発揮した重要なモメントであった。

その興奮冷めやらぬなか、雄弁会は次に総選挙という政治イベントへとなだれ込む。まず一九一一年一〇月三十一日、彼らは臨時大会を「理想選挙に関する学術的大演説会」と銘打って開催。「理想選挙候補者」・古島一雄の支援活動を開始した。⁽³¹⁾しかもそれは都下に限ったものではなく、「千葉県下に於ける栗山博、大木康孝君。宮城県下に於ける佐竹勇一郎君。山形県下に於ける芳賀栄造、寒河江堅吾、大戸愿勝君。秋田県下に於ける沖口圭介君。〔中略〕長崎県下に於ける堀川直吉君等其他十数名」⁽³²⁾などとあるように、全国的な規模において展開されたものであった（概ね国民党候補者を支援）。そして「この選挙を契機として、従来の学内活動から大きく外部、即ち社会的方面に向つて其の驥足を伸したのである」⁽³³⁾と栗山が回想するように、これ以降、雄弁会の学外・院外における政治活動はいわば公然化していくこととなるのである。

三 大正前期の雄弁会（一九一三～一八年）

大正政変を前後して、雄弁会出席者のなかからは政治結社を立ち上げ、独自の政治運動へと身を転じる者も現れはじめる。橋本徹馬を中心とした立憲青年党（一九二二年二月結成）はその代表的存在である。結党と同時に大学を退学した橋本は、この後、尾崎士郎や加藤勘十など、雄弁会や他校弁論部出身の有能な若者を取り込みつつ、第一次大戦

後に至るまで「院外青年」運動の先頭を走ることとなる。

一方、丁未倶楽部も大正政変を契機としてはつきりとした形で政治運動に関与しはじめる、というよりは政治運動を巻き起こす存在として認知されはじめる。一九一三年一月一九日、そして翌月四日の両度、彼らは全国青年大会を主催し、七百、千八百という大規模な聴衆を動員することに成功した。⁽³⁴⁾ 彼らは官僚政治に政党政治を対置し、政党及び議会政治の将来に絶対の信頼を寄せていた。眼前の政党・議会政治は満足のものではないかもしれないが、それは変わる。なぜならば我々が、それを変えるからだ。

このように、学生と政治との抱合が自明のものとなりつつあった大正前期、雄弁会はいかなる状態にあったのか。以下、前章を継いで議論を進めていく。

まず、例会を軸とする点に変わりはないが、それは一九一三年五月に稲田直道、沖口圭介、舟崎俊三の三名が新幹事に就任した後、毎週開催から隔週開催へと変更されている。⁽³⁵⁾ これは一五年までには旧に復しているが、その年から一六年にかけて幹事を務めた丹尾磯之助が、「一两年前迄は雨の夜や寒い夜など例会には僅か四五名位しか来る人がなくて数名の弁士兼聴衆といふ事も二三度ではなかったが近來は如何なる風雨の夜も必ずしも三四十名多きは百四五十名より二百名程もある」⁽³⁶⁾と述べていることを考えあわせれば、一九一三―一四年頃に一旦出席者が減少し、活動の停滞期があったことを窺わせる。⁽³⁷⁾

なお、論題の性格や招待弁士の顔ぶれ、OBの参加などについても大きな変化は認められないが、一九一三年五月一日に開かれた予餞会を兼ねた校友演説大会に、永井柳太郎以下栗山博に至るOB連、さらには田熊福太郎（法政大学）、常田力（中央大学）、斎藤徳造（日本大学）といった丁未倶楽部の関係者が招かれているのが目を引く。⁽³⁸⁾ 一九一六年入学の尾崎士郎が、雄弁会は「校外の先輩と校内の後輩とをつなぐ交遊機関」⁽³⁹⁾でもあったと述べているように、

この時期までの雄弁会の大きな特徴の一つとして、先輩・後輩関係の親密さがあったという点を重ねて強調しておきたい。

次に例会・大会（この頃までには春季・秋季二回の年次大会が慣例化している）の延長線上に位置づけられる活動として、討論会、懸賞演説会、高等予科演説会などが挙げられる。討論会には創立期以来の歴史があるが、この時期にも「西伯利亚出兵の可否」⁽⁴⁰⁾などといった時局即応型のテーマが設定されている。また懸賞演説会についてもすでに前章にみたが、この時期には聴衆が審判員に加わりとともに、優等者にはメダルなどの記念品が授与されるまでに競技性が高まっている。⁽⁴¹⁾最後の高等予科演説会は、管見の限り一九一六年にはじまる新しい試みであるが、それは従来大学部あるいは専門部の学生を主な出席者としていた雄弁会に、予科生が早々に参加しはじめたことの証左といえよう。先に引いた丹尾の言葉が物語るように、一九一五～一六年の交から、雄弁会は再び活気を取り戻しはじめたのである。

さらにこの時期に顕著な特徴として、連合演説会の開催が極めて頻繁化していることがある。一例として一九一六年度（一九一六年一〇月～一七年五月）の雄弁会派遣弁士（開催日・開催校等）を以下に列挙する。

里兵衛門（一〇月七日・東洋大学）、雁住又朗（二二日・国学院大学）、杉浦健之助（二八日・宗教大学）、瀧（森下）国雄（三日・専修大学）、佐々木修一郎（二一月三日・明治大学）、武谷甚太郎（五日・日本大学）、松井通（二八日・豊山大学）、橋本求（同日・第一高等学校）、尾崎士郎（二五日・中央大学）、大立目直武（二月三〇日・農業大学）、藤井仙吉（二月四日・政法大学）、高橋円三郎（二五日・曹洞宗大学）、丹尾磯之助（三月一二日・青年雄弁社主催連合演説会）、荒本章（五月二五日・慶應義塾）⁽⁴³⁾

とりわけ秋季開催が目立ち、ほぼ毎週のようにどこかで連合演説会が開催されていたといっても過言ではない。全国レベルの大会にも規模の拡大がみられ、一九一八年五月五日の東西学生雄弁大会（於早稲田大学）には実に二一の

大学・学校が参集している。⁽⁴⁴⁾ 前章において、雄弁会・弁論部活動は一種の競技スポーツとしての色彩を帯びはじめたと指摘したが、その傾向は大正前期に至って完全に確立したとみてよい。

雄弁会出席者の院外活動についても触れておかなければならない。具体的には、第一二回総選挙（一九一五年三月二五日）に際して、大隈伯後援会と一体となって展開された一大演説活動がそれである。时期的に雄弁会の再活性化と重なっているという点にまずは留意しておきたい。一九一五年一月一八日、大隈伯後援会全国大会において、遊説部の設置、さらには丁未俱樂部との提携（「我遊説部の主張と異なる所なきを以て」）が決議された。ここから、一道二府三三県にわたる九六回の遊説（演説度数三三四）と、五七名の弁士による二府三八県一〇一名の与党候補者に対する応援演説（演説度数一〇二八）とが絡みあいながらスタートするのである。⁽⁴⁵⁾

彼らの主張は、「人民のコースを賛成せねば成らぬ、大隈伯ハ其代表者、政友会ハ官僚のコースなり」⁽⁴⁶⁾ などといった単純明快なものであったが、それが南極探検隊後援、第一一回総選挙、大正政変と段階を踏みつつ深みを増していった政治意識、そしてその過程において、あるいは頻繁化する連合演説会を通じて次第に強化されていった「横のつながり」によって支えられていたということを見逃してはならない。

ところで上記の運動は、一つの副産物を生み出すこととなった。東洋会なる組織がそれである。同会は「早稲田大学雄弁会を後援し国家有用の人材を養成すると共に新文明の氣運を促進するを以て目的」とし、一九一五年一〇月三一日に発会式が開かれている。発起人は井芹継志、永井柳太郎、比佐昌平、宮沢胤男、山森利一らであり、名誉会長として高田早苗が推戴された。⁽⁴⁷⁾ いわば雄弁会のOB団体であるが、宮沢の回想によれば、総選挙に際しての各大学弁論部の働きに対する謝金を元手としており、「幹事をしたもののみが入会を許された」⁽⁴⁸⁾ という。また、彼らは雄弁会に対して金銭的援助も行っていた。⁽⁴⁹⁾

そうした動きに触発されたものか、ほぼ時を同じくして、菊池哲春、丹尾磯之助、西岡竹次郎、吉永半平ら当該期における雄弁会コア・メンバーの多くが在籍していた寄宿舎にも動きがみられた。まず同年秋、前年に解散していた修養部を再興する格好で雄飛会が組織され、つづいて二月二日、西岡が中心となって梓会が発会式を挙げた。後者は「東洋会の弟分」とも評されているが、西岡によれば、連合演説会に出場できる者を少しでも増やそうとの思惑から作り出されたいわば雄弁会のクローンであった。そして実際、梓会は雄弁会と同じように例会や大会を開催し、思惑通り連合演説会に弁士を派遣することができたという。⁽⁵²⁾

ここに至って、OB団体である東洋会、寄宿舎内には修養部の後身である雄飛会とクローンである梓会といったように、雄弁会をめぐる状況は複雑な様相を呈してくる。簡単に整理しておく、東洋会は明治末年以降つづいてきた密接な先輩・後輩関係が具現化したものと捉えうるし、雄飛会については、修養部の解散がまさに雄弁会の停滞期における出来事であったことが示唆するように、雄弁会の再興と歩調を揃えて旧態を取り戻したものとみてよい。梓会については西岡の個性がかなりの程度影響しているものと考えられるが、あえてそれを抜きに考えると、連合演説会の頻繁化が雄弁会の再活性化と同時並行的に進んだことが一つの背因として指摘できよう。「晴れ舞台」は増えたとしても、そこを目指すライバルがそれと同じようなペースで増えたならば、競争は激しくなることはあっても減じることはない。しかし雄弁会をもう一つ作れば、競争は一挙に半減する。それが西岡の機知であった。

以上のように、一九一三―一四年頃の一時的な停滞期を挟みつつも、雄弁会は依然勢力を維持し、創立期以来積み重ねられてきた活動スタイルを確立しようとしていた。OBとの関係も良好であった。一九一五―一六年頃は雄弁会第二の黄金時代であったと評価してもよい。しかしそうした状況は、一九一七年夏の早稲田騒動、そして第一次大戦後の時代状況のなかで、急速度をもって変容を遂げていくこととなる。

天野派と高田派、大学を二分する深刻な抗争へと発展した早稲田騒動において、雄弁会出席者たちの多くは現学長天野為之支持に回った。この点について『早稲田大学百年史』は、大学の内部関係者には「〔経営手腕に対する不信任から〕天野支持は殆どなかった」が、「学生には、経営的な内部事情に理解の及ぼう筈はないので」逆に天野支持が多数を制していたと指摘している。⁽⁵³⁾それは事実といってよい。しかしながら、天野派学生の中心的存在であった雄弁会出席者・尾崎士郎が、「高田是なる乎、天野非なる乎、といふ問題は尠くとも今日に於て学校問題の本質」ではなく、「所謂 Democratic basis ⁽⁴⁷⁾ (民本的基礎) の上に立て学校の制度、組織を改定する事を離れて此問題に意義を認むる事は出来ない」⁽⁵⁴⁾と認識していたということもまた事実であるといわなければならない。

実はこの前年の三月、寄宿舎でも一つの騒動が起きていた。尾崎とともに天野派のリーダー格であった西岡竹次郎がその首謀者である。西岡に率いられた舎生たちは、「自治制に基き舎生中より代表者を選出し以て代議機関を設立」することや「毎年三月舎生議會を開き来年度の予算を附議決定」することなど、つまりは寄宿舎運営の民主化を大学当局に強く要求していた。⁽⁵⁵⁾

尾崎や西岡の主張は、彼らが“Democratic basis”という価値基準をすでに深く内面化しており、それに沿わなければ、大学であろうと寄宿舎であろうと批判の対象とされるに至ったということを教えている。早稲田騒動とは、雄弁会史上、その矛先がはじめて大学へと向けられた画期的事件であった。そして彼らは、直後の一九一八年一月、「普通選挙ヲ実施シ以テ民本主義ヲ發揚スヘシ」などと綱領に刻む全国青年急進団⁽⁵⁶⁾を結成し、一斉に院外へと飛び出していく。早稲田騒動と普選運動とは、彼らのなかでは、“Democratic basis”という旗印のもとでシームレスに解釈されるべきものであったのである。

さらに早稲田騒動は、雄弁会の現役出席者とOBとの蜜月に終止符を打ったという意味においても重要な出来事である。

あった。九月一三日、天野派の校友・学生は占拠していた大学を撤退し、寄宿舎に籠もった。しかし一五日、今度は高田派の母校擁護団が寄宿舎を奪還・占拠するという事件が起きる。この擁護団のメンバーには、皮肉なことに、浅川保平、比佐昌平、栗山博ら黄金時代の雄弁会OBも含まれていた。⁽⁵⁷⁾ むろん永井柳太郎の存在が示すように、OBイコール高田派というわけでは必ずしもなかったが、それが学生とOBとの間に生じたはじめての対立であったことに変わりはない。

このように、早稲田騒動は雄弁会史上、大きなターニング・ポイントとなった。翌年幹事を務めた大立目直武は、次のように述べている——「大正六年は熱血燃ゆる若き青年学徒嘆息の中に消えた。戸山ヶ原に木枯の吹き荒ぶ頃早稲田も静になった。雄弁会も又静にせざるを得なかった」。⁽⁵⁸⁾ そして一九一八年二月一五日、早稲田大学維持員会は寄宿舎の廃止を決定。しかしもはや学生たちが反対運動に立ち上がることはなかった。⁽⁵⁹⁾

四 大正後期の雄弁会（一九一九～二六年）

一九一九年四月一九日、大立目以下六名の新幹事は、早稲田騒動の余波から「甚だ緩慢なる状」を呈していた会活動を盛り返すため、「願くば過去をば過去として葬り去らしめよ」との宣言を発表した。⁽⁶⁰⁾ しかしその裏面において、雄弁会が長らく保ちつづけてきた一体性は急速に失われようとしていた。

最近の早大雄弁会は、指導者に其の人を欠き、学生の熱心も足らざるために、振はざること甚しきものがある。単に振はない計りではなく、会内に幾流かの系統ありて衝突、暗闘、醜態の限りを尽して居ると云ふことを、我等は時々耳にするのである。⁽⁶¹⁾

これは西岡が創刊した雑誌『青年雄弁』に掲載された「早大田村生」からの投書の一節である。告発された内部対立の存在は、前章においてみた、全ては“Democratic basis”に従うべきとする思想潮流とむろん無関係ではない。早稲田大学におけるその象徴的表現が、一九一九年二月二日に「世界の主潮デモクラシーの研究及宣伝」⁽⁶⁵⁾を謳って発会式を挙げた民人同盟会、さらには和田巖、浅沼稻次郎、稲村隆一、三宅正一らその同人の一部が同年秋に結成した建設者同盟であることは衆目の一致するところであろう。ここでその実態に深入りする余裕はないが、問題は彼らと雄弁会との関係である。

結論からいえば、民人同盟会と雄弁会とは「メンバーもほとんど重複し、思想的にも表裏一体の関係にあった」⁽⁶⁴⁾。まさしく「雄弁会の連中が民人同盟会を作った」のである。しかし双方は一致していたのではなく、雄弁会出席者のなかには「民主主義なんていうのは国賊だ」と主張する「国家主義、国粹主義者」や「大アジア主義者」も存在したという事実を看過すべきではない。⁽⁶⁵⁾つまり、「世界の主潮」に乗った雄弁会出席者の一部が民人同盟会（建設者同盟）という形態をとって屹立したことで、イデオロギー的多様性のバランスが大きく崩れたのである（社会主義思想自体は、すでに一九一六年頃から雄弁会に入りはじめていた）⁽⁶⁶⁾。

しかも建設者同盟の同人たちは、当時池袋にあった北沢新次郎教授宅の隣家を借りて共同生活を営んでおり、會員制を採らず、しかも寄宿舎を失ったばかりの雄弁会と比較すれば、求心力を確保する上において圧倒的に有利な立場にあった。そのゆえもあつてか、浅沼をはじめとする同人たちのやり口は、極めて露骨であつたようである。

「社会主義の宣伝と推進のため」学内にあつては雄弁会を活用すべきであるとして自由主義的學生によつて指導されていた雄弁会の中に建設者同盟の指導権を確立して雄弁会を通じて學生に訴えていた。そうして各大学の雄弁会には代表弁士の外に十四、五名の応援団を派遣して、社会主義か資本主義かの区別によつてその演説に対し、声援をおくり或は野次り倒すと云つ

た方法でわれわれの主張、思想の拡大に努めた。⁽⁶⁷⁾

つまり学内に向かつては雄弁会を「活用」し、学外に向かつてはやはり雄弁会と他校弁論部との「横のつながり」(その結節点としての連合演説会)を転用しようというのが彼らの戦略であった。そして一九二三年初頭、「雄弁会は幽弁会と変じ建設者同人によつて乗取られた」⁽⁶⁸⁾との報道をみるに至るのである。「雄弁会が左すぎる」として東洋会が金銭的援助を打ち切ったのも、ちょうどその頃のことであつた。⁽⁶⁹⁾

こうして雄弁会の構造は激変にさらされることとなつたわけであるが、それをこれまでの議論を敷衍しつつ整理すると次のようになる。大正前期までの雄弁会は、幹事という核を、出席頻度によつて中心から次第に濃度を落としていく同心円が取り囲む構造をどうにか保つてきた。しかしここに至つて、いわばイデオロギーという「色」を異にする構造が複数浮上し、重なりあうこととなつた。構造の多元化である。さらにそのなかで最も新奇かつムラのない「色」が民人同盟会(建設者同盟)という形でその輪郭を鮮やかに縁取るとともに、他の「色」への浸潤を開始するに至つて、多元化した構造は容易に対立構造へと転化した。そしてその過程において、雄弁会を外部から包み込んできたOB組織は硬化し、後輩支援というかつての役割を一時的にせよ放棄するに至つたのである。

以上の背景を踏まえた上で、以下、この混迷時代における雄弁会の実態に迫りたい。まず例会・大会などの開催は従前に同じであるが、それらへのOBの参加は目にみえて減少している。また、一九二一年六月二日に開催された公開演説会では、稲村隆一や中村高一など建設者同盟の同人も壇上に立ち、「社会主義者や国粹論者、野次、警官等が入り混り、時々大騒ぎが演ぜられた」⁽⁷⁰⁾という。参考までに、例会等における建設者同盟同人の論題を拾ってみると、「革命の哀音」(中村)や「滅び行く早稲田」(浅沼)など、やはり早稲田騒動以前とは明白な対照を示していることが分かる。

連合演説会についても依然として活況を確認することができる。一九二二年九月―十一月を例にとれば、雄弁会が弁士を派遣したのだけをとっても、九月に一回、一〇月に九回、十一月に五回という驚異的なペースで開催されており、しかも大阪高等工業学校や愛知齒科医学校など、関西や東海方面への弁士派遣も増加している。⁽⁷⁾

こうした盛り上がりを支えたのが、各校弁論部間の連絡を円滑化し、「弁論の權威を發揚する」ことを目的として、一九一九年十一月二三日に結成された都下各大学・専門学校雄弁連盟である。これは雄弁会第二の黄金時代（一九一五―一六年頃）に一時活動を行っていたという同様の連合組織・春秋倶楽部の流れを引くものであったというが、計二六校が加盟した同連盟は、毎年四・九月に協議会を開き、一年任期の当番校二校が連合演説会の差配などの庶務を担当する一種の規律化された運営委員会であった。⁽⁷⁾ その点、先鋭分子がゆるやかに結びついた煽動的政治集団ともいうべき丁未倶楽部とは質を異にしていた。

なお、これとはつきりとした年月は不明であるが、一九一九年五月から二二年六月までの間に、会長が田中穂積から大山郁夫に代わっている。雄弁会の左傾化をある意味では象徴する人事といえよう。

ところで一九二三年春、浅沼ら主要同人が一斉に卒業を迎えた建設者同盟は学外団体へと改組され、残った学内者は民人同盟会から分かれた文化会（ここにも戸叶武らの雄弁会出席者が参加していた）と合流して文化同盟を結成した。

その直後の五月一二日、雄弁会にとつては早稲田騒動につづく第二の試練ともいえる出来事が突発する。所謂軍事研究団事件である。かつて雄弁会の地方巡回講演に参加したこともある青柳篤恒を団長とする軍事研究団が、渦巻く弥次のなかでその発会式を強行したのは二日前。それに反対する文化同盟及び雄弁会が主体となつて企画された学生大会に、森伝率いる縦横倶楽部――早稲田騒動に際して運動部員を中心に組織された「武断派」集団――⁽⁷⁾らが乱入し、前代未聞の流血事件へと発展したのである。それは早稲田騒動の後、雄弁会内に先行的に表面化した左右のイデ

オロギー対立が、もはや学内全体を覆い尽くそうとしていたことをはっきりと示す事件であった。なおこの後、軍事研究団と文化同盟はともに解散へと追い込まれている。⁽⁷⁴⁾

翌月五日には所謂研究室蹂躪事件（警察が治安警察法違反の嫌疑により佐野学及び猪俣津南雄両講師の研究室を捜索⁽⁷⁵⁾）がつき、雄弁会は大山会長を旗頭に大学擁護運動に乗り出すなど氣勢を揚げるかにみえたが、同年十一月、『早稲田大学新聞』記者の問いかけに対し、幹事の一人は次のように苦衷を滲ませざるをえなかった——「騒擾〔軍事研究団事件〕以来会員は四分五裂で顔を見せないのも何事もなす事が出来ない」云々と。⁽⁷⁷⁾

しかし幸か不幸か、結果として建設者同盟及び文化同盟の羈絆を脱することとなった雄弁会は、一九二四年以降、徐々に落ち着きを取り戻していく。戸叶武、橋本登美三郎、渡辺利太郎、佐藤観次郎といった面々がこの大正末期の主役である。まずは勢力の挽回を確認するため、例会等を報じた記事を通覧してみると、例えば一九二四年一月一日の例会では「新顔弁士多数」が登場し、なかでも「紅一点松岡節子嬢」の参加が目を引いたとあり、翌年四月二五日の新人生歡迎演説会は「聴講五百の大盛況」であったという。⁽⁷⁸⁾

さらに一九二六年夏に企画された台湾・中国・朝鮮遊説は、結局のところ「視察が中心となつた」とはいえ、橋本らのコア・メンバーが精力を傾注して実現にこぎ着けた、雄弁会の再生を印象づける一大イベントであった。⁽⁷⁹⁾

こうした人員の入れ替わりや勢力の回復は、活動内容あるいは方向性の変化となつて現れてもくる。時局問題講演会の頻繁な開催もその一つである。そういえば依然として戦闘的な姿勢が保持されたかのように聞こえるかもしれないが、そうではない。というのも、それらは例えば、①一九二四年五月三一日の日露提携問題に関する講演会であったり、②十一月八日の労働問題講演会であったり、③二五年五月九日の婦人問題講演会であったりしたわけであるが、①は後藤新平、②は鈴木文治、③は久布白落実らといったように、当該問題に関する識者を招いたいわば学術講演会

としての性格が強かった⁽⁸⁰⁾。

かといって、大正末期の雄弁会が学術団体と化したなどというつもりもない。事実、この時期に至っても彼らの政治運動への関与はつづいていた。もっともそれは、浅沼や三宅ら一世代前の先輩たちが投じていった農民運動や労働運動ではなく、さらにその上の先輩、すなわち尾崎や西岡らの時代からつづく普選運動であった。一九二四年一月二〇日、雄弁会は全国学生普選連盟の実行委員会に参加している⁽⁸¹⁾。

こうした雄弁会の穩健化は、援助を中断していたOB連にも好印象を与えたものとみえ、佐藤観次郎によれば、「私の時代にこれ〔東洋会との交流〕を復活して、春秋二回、外にピクニックなどやって、先輩と学生との融和を計つた⁽⁸²⁾」という。早稲田騒動以降、深みを増す一方であった双方の溝に、再び安定した橋が架けられようとしていた。

しかし一九二六年一月初旬、会長の大山郁夫が突如として辞任を発表（後継の第四代会長は二木保幾。その理由についてある新聞記事は、学部長人事も絡み、「常に左傾思想に走り純真な学生の指導をあやまるものだ」とされてゐた⁽⁸³⁾大山が、「依然学校当局から睨まれてゐる雄弁会の会長」をつづけるのは好ましくないとする大学首脳の意向が働いたものと観測している）。残念ながらその当否を判断する材料は持ちあわせないが、いずれにせよ確かなことは、穩健化しつつあったとはいっても、雄弁会はすでに「学校当局から睨まれてゐる」存在として認知されていたということである。見方をかえれば、雄弁会の落ち着きは内在的要因にのみよっていたのではなく、早稲田騒動以降に方向づけられた外在的要因、すなわち学生運動に対する大学当局の警戒姿勢とも決して無関係ではなかったといえよう。

その意味において、大山会長の辞任を伝える記事と一緒に掲げられた「白くなる雄弁大会」と題する記事は極めて象徴的である。一月二三日、全国大学・専門学校招待演説会を開催予定の雄弁会が、以下の諸項目に触れる論題の制限案を提出したというのである。

一、帝国主義批判

イ、金融資本と階級関係

ロ、軍事教育と軍国主義

ハ、植民地未半開国と先進資本主義国の関係

二、帝国主義戦争

ホ、資本主義の崩壊過程

二、大学行政に対する学生の参与

これがたとえ自粛ではなく、大学当局からの要請によるものであったとしても（当日は高田総長も参列予定と報じられている）、その意味するところが言論の自由に対する挑戦にほかならない以上、それは雄弁会による自らの存在意義の否定をも意味しかねない危険な提案であった。しかし翌年頭に生じた所謂大山事件⁽⁸⁾は、上記のような論題を公然と叫び、さらには運動へと走ったならば、存在意義以前に存在そのものが抹消されかねない状況下に彼らが置かれていたということを教えている。

教授と政党委員長との両立を認めない大学当局による大山教授の解職を前後して、雄弁会や社会科学研究会（二九二四年五月に大山を会長として結成。大賀駿三など雄弁会出席者も少なからず参加していた）が中心となつて進められた留任運動は、恐らくは彼らも予想だにしなかったであろう厳しい処罰をもつて報いられることとなつた。政治活動の機会としないことを条件に許可された二月一〇日の大山教授告別演説会の席上、彼らが学生自治同盟の結成へと進んだことを重くみた大学当局は、同盟を即時禁止とした上、二三日までに第一・第二高等学院の生徒六名を含む一五名に退学、八名に無期・有期の停学、一四名に譴責の処分を申し渡したのである。⁽⁸⁵⁾再び佐藤観次郎の言葉に耳を傾けよう。

大山教授事件を後にして、珍らしく早稲田は揺れていた。殊に雄弁会にも相当の犠牲者があり、第一・第二早高の弁論部にも退・停学者が出たので、大学で雄弁会に入る人は少なかった。(中略) なんだか大学は火の消えたような風であった。(86)

このように、雄弁会にとつての昭和の幕開けは冬の時代のはじまりとなつた。いやむしろ、本章の議論からすでに明らかなように、この頃には「雄弁会」という括りのみによつては、自己主張を試みようとする学生たちの実態を把握することがほぼ不可能となりつつあつた。雄弁会の出席者たちは、核であるはずの幹事をも含めて、同時に民人同盟会、建設者同盟、文化会、文化同盟、あるいは社会科学研究会、新聞学会等々のメンバーでもありえだし、事実そうであつた。集団としての外延をついぞ設定することのなかつた「自由なる悪く言へば不規律な会」が、それまでまとまりのある構造を維持しえたこと自体が奇跡的であつたともいえる。いうならば〈一隻の船〉であつた雄弁会は、ここに至つて、はじめてその本来の姿ともいふべき〈船員たちの寄せ場〉へと変貌を遂げたのである。

しかしその〈寄せ場〉も波にさらわれる時が来る。一九二八年六月に辞任した二木会長の後任をえることのできなかつた雄弁会は、翌年五月一〇日、継続願出の期限切れのため、事実上解体へと追い込まれた。(87)

おわりに

雄弁会の創立は、激しい政治運動の所産であつた。それを継いだ者たちは、学術的な下地をしつらえつつ、そこに例会を軸とする活動スタイルの相型を打ち立てた。そうして明治末年に訪れた黄金時代は、雄弁会に再び政治色を添え、それは連合演説会や丁未倶楽部に象徴される「横のつながり」を通じて、学生弁論界全体を染めていくこととなつた。

それと時を同じくして、雄弁会出席者たちは院外へと飛び出し、「院外青年」運動の創始者あるいはその併走者となっていく。「雄弁」を武器に、〈真の〉議会政治の担い手を自任する彼らは、日露戦後という時代が生んだ新たな「政治青年」の典型であった。

彼らを育てた雄弁会は、一貫して自由を尊び排除を憎んだ。ゆえにその構造は確固たるまとまりを持ちえず、幹事を中心とした遠心的な人間関係によってかろうじて成り立っていたといえる。しかし寄宿舎という好伴侶は、そこに生活に根を下ろした紐帯を付与した。さらには折からの弁論ブームも手伝って、その構造ならざる構造は、やがて持続する構造、つまりは慣習へと昇華していったのである。

大正期に入っただけで、雄弁会には停滞期が訪れたが、それとても一時的なもので、すぐさま勢力を回復し、第二の黄金時代を迎える。連合演説会の活況や競技性の過熱化などは、そうした雄弁会の浮沈と軌を同じくしており、ここに至って、戦前における学生弁論文化は完全に確立をみた。しかしそれは長くはつづかなかった。

早稲田騒動を契機として、雄弁会は大学をも批判対象化するに至り、当局及びOBとの間の良好な関係に亀裂が生じはじめる。そしてそこに追い打ちをかけたのが、第一次大戦後における思想潮流であった。民人同盟会を皮切りに次々と出現しては消えていった学生団体の多くは、各々「色」を異にしつつも、延々と広がる雄弁会の同心円構造と多かれ少なかれ重なりあうこととなった。その結果、人員の所属は錯綜を極め、イデオロギー対立に翻弄されるなかで雄弁会の一体性は急速に損なわれた。

大正末期、「白くな」ったとも評されたように、雄弁会は穏健化しつつあったようにみえる。しかしそうしたなかにあっても政治運動の火は守られていたし、そもそも雄弁会出席者が往々にして他集団のメンバーでもあった当該期、雄弁会に関する報道のみをもってしては彼らの全体像を捉えることはできない。加えて早稲田騒動以降、硬化を

はじめた大学当局の姿勢も無視しがたい。

本論の最後で、筆者は雄弁会が〈船〉から〈寄せ場〉へとある意味では回帰したと指摘した。しかしそれは反面、次のような問いと不可分である。すなわち、仮に雄弁会が他者の乗船を拒む堅固な箱船であったならば（ありつづけたならば）、大正後期におけるあのような学生運動の輝きを、果たして認めることができたであろうか。

取り組むべき課題も残されている。第一に、とりわけ早稲田騒動以降のそれであるが、大学当局の姿勢の変化については実証的に議論を深めることができなかった。この問題については、焦点を早稲田大学に絞らず、より広く、大

学行政の推移という観点から扱う必要があることはいうまでもない。

第二に、紙幅の都合もあり、本稿では他大学の動向についてはほとんど触れることができなかった。すでに触れたように、近年、各大学の弁論部史類が相次いで刊行されている。そうした諸成果を取り込みつつ、大学弁論部の比較史的研究を展望することもまた筆者に課せられた大きなテーマの一つである。

註

(1) 例えば百年史編集委員会編『早稲田大学雄弁会百年史』

（早稲田大学雄弁会OB会、二〇〇二年）は、横井国重責任編集『五十周年記念出版 早稲田大学雄弁会』（早稲田大学雄弁会、〔一九五二年〕、八十年史編集委員会編『早稲田大学雄弁会八十年史』（早稲田大学雄弁会OB会、一九八三年）と積み上げられてきた時代毎の幹事・出席者の回想文を集成した証言記録集となっている。なお近年、中央大学（二〇〇一年に百年史）、拓殖大学（二〇〇七年に

百年史、慶應義塾（二〇〇八年に一二〇年史）、明治大学（二〇一〇年に一二〇年史）と、明治期に創立された各校弁論部の年史類が相次いで刊行されている。

(2) 代表的な研究として、岡義武「日露戦争後における新しい世代の成長 明治三八年〜大正三年 上・下」『思想』五一・五一三号、一九六七年一・三月がある。

(3) その詳細については、伊東久智「政友会の院外団と「院外青年」」安在邦夫ほか編著『近代日本の政党と社会』（日本経済評論社、二〇〇九年）。同「大正期の「院外青年」

運動に関する一考察——橋本徹馬と立憲青年党を中心に」『東洋文化研究』一三号、二〇一一年三月を参照。

- (4) 丹尾磯之助「早大雄弁会発展史(一) 雄弁会前身時代」『雄弁』七巻四号、一九一六年四月一日、二一四頁。以下同誌については発行年月のみを記す(毎月一日発行)。

- (5) 菊地茂「学生の鉅毒救済運動」田中翁遺蹟保存会編纂部(代表栗原彦三郎)編『義人全集第四編 鉅毒事件下巻』(中外新論社、一九二七年四月)。

- (6) 菊地茂をはじめとする雄弁会創設メンバーは、第八回総選挙(一九〇三年三月一日)に際して島田三郎の応援活動を展開し、「上部に赤い文字の英語で、"Justice is always strong"と書き、中央に黒文字で「正義常強」と書いた旗を押し立てて繰り出」すなど、その激しさから全員拘留の憂き目にあったという(斉藤英子「田中正造とともに闘った父菊地茂」『谷中村問題と学生運動 菊地茂著作集第一巻』早稲田大学出版部、一九七七年、四三三五頁)。

- (7) 「早稲田大学雄弁会の設立」『早稲田学報』七八号、一九〇二年二月二十五日、五一六―五一七頁。以下『学報』と略記し、発行年月のみを記す。

- (8) 丹尾磯之助「早大雄弁会発展史(三) 興隆時代」『雄弁』七巻七号、一九一六年六月、一七〇頁。一部句点を補った。
- (9) 「討論会(第九十四回雄弁会)」『学報』一六六号、一九〇八年二月、六五頁。

- (10) 西岡竹次郎「東都学生界に、鳴りひびいた「壇下の雄

弁」若人の心胆を寒からしむ」前掲『五十周年記念出版 早稲田大学雄弁会』、一一頁。

- (11) 安蔵秋月(吉次郎)「早稲田雄弁会公開の回顧(余が日記の一節)」『雄弁』二巻五号、一九一一年五月。

- (12) 「雄弁会決戦演説会」『学報』一四六号、一九〇七年四月、五四頁。

- (13) 「学報」は一九〇八年一〇月一七日開催の連合演説会を「第二回」と報じている(「第二回各学校連合演説会」、一六六号、一九〇八年二月、六五頁)。

- (14) 「早大では弥次を壇下の雄弁家と称し弥次は弥次で「壇下雄弁家の滅亡は早大雄弁会の衰亡を意味す」杯と呷り出すから迂闊り案内の判らぬ田舎出の者など登壇するとひどい目に逢ふ。(中略)手を挙げテーブルを叩き口角泡を飛ばして悲憤慷慨し甚だしきは切齒扼腕する者もある。恐らく早大の如き猛烈な激烈な演説会是他にはなからう。早大では是を早稲田式と称する」(芳賀栄造「都下各大学及専門学校弁論発達史」『雄弁』一〇巻一号、一九一九年一月、二四三頁。一部句点を補った)などである。

- (15) 社史編纂委員会編『講談社の歩んだ五十年(明治・大正編)』(講談社、一九五九年)、二四頁。

- (16) 猪野毛利栄「擬国会の入閣運動」『雄弁』一一巻一一号、一九二〇年一月、一一六頁。

- (17) 史料上で「安部会長」を最後に確認できるのは一九〇七年三月一日(前掲「雄弁会決戦演説会」)、「田中会長」

を最初に確認できるのは翌年一〇月一七日である（前掲「第二回各学校連合演説会」）。この交代については、安部の社会主義的色彩が「会長として都合が悪」かったためとする上井磯吉の回想と、運動部にばかり力を入れる高田早苗の方針に反感を抱いた安部が辞職したためとする宮沢胤勇の回想とがあるが（前掲『五十周年記念出版 早稲田大学雄弁会』、五～六頁）、詳細は交代の年月とともに不詳である。

- (18) 以上、早稲田大学舎生会『明治三十拾七年参月起 会誌』（早稲田大学史資料センター所蔵「三号館旧蔵資料」所収）。

- (19) 早稲田大学大学史編集所編『早稲田大学百年史 第二卷』（早稲田大学、一九八一年）、一一四九頁。

- (20) 「寄宿舎々生会修養部第四十三回例会」『学報』一六七号、一九〇九年一月、一七頁。「第四十七回寄宿舎修養部例会」同誌一七一号、同年五月、一八頁。

- (21) 前掲「三号館旧蔵資料」所収の早稲田大学寄宿舎「明治三十七年起 舎生名簿（甲号）」、「第一舎生（・第二舎生名簿）」（早稲田大学出版部野紙綴）。

- (22) 「発刊の辞」『雄弁』一号、一九一〇年二月、一～二頁。傍点引用者。

- (23) 「過去一周年間の談論界」『雄弁』二卷二号、一九一一年二月、二一四頁。

- (24) 南北社編『早稲田生活』（南北社、一九一三年七月）、二

三頁。一部誤植を修正した。

- (25) 「雄弁会員の京都行」『学報』一九〇号、一九一〇年二月、一四頁。鉄生・青生「中央新聞主催第二回学生雄弁大会」『雄弁』二卷五号、一九一二年五月。

- (26) 一九一一年四月三〇日にその第一回が開かれている「雄弁会主催都下中学連合演説会」『学報』一九六号、一九一一年六月、一九～二〇頁。

- (27) 一九一二年二月八日の懸賞演説大会では、田中穂積、山崎直三、内ヶ崎作三郎、永井柳太郎が審判員を務め、一等に堤康次郎と松枝徳麿、二等に佐久間六と豊田大誓、三等に河野茂男と後の朝鮮独立運動家・張徳秀が入選している（「懸賞演説大会」『学報』二一五号、一九一三年一月、一三頁）。

- (28) 「夏期巡回演説弁士予選演説会」『学報』二二〇号、一九一三年六月、一三～一四頁。

- (29) 「南極探検応援演説会」『学報』一九六号、一九一一年六月、一九・二〇頁。

- (30) 「青年学生起つ」『読売新聞』一九一二年八月二日。「南極探検遊説」『東京朝日新聞』同日。

- (31) 「臨時雄弁大会」『学報』二〇二号、一九一一年一二月、一七頁。

- (32) 新緑生「総選挙に於ける早大雄弁会員の奮闘」『雄弁』三卷七号、一九一二年七月、一九一頁。一部句読点を補うとともに、人名の誤りを修正した。

- (33) 粟山博「雄弁会」回顧録「前掲『五十周年記念出版 早稲田大学雄弁会』、七頁。
- (34) 警視庁規画課教養係編『大正二年騒擾事件記録』荻野富士夫編・解題『特高警察関係資料集成第一九巻 特高関係重要資料』（不二出版、一九九三年）、九〇・一八〇・一九頁。
- (35) 松枝徳磨「早稲田演壇から」『雄弁』五巻一号、一九一四年一月、四三七頁。
- (36) 「丹尾磯之助」『早稲田だより』『雄弁』七巻四号、一九一六年四月、一四九頁。
- (37) しかしその間、例えば一九一四年二月九日には、雄弁会は立憲青年党や慶應義塾弁論部とともにシーメンス事件を糾弾する全国青年大会を共催するなどしている（『全国青年大会』『読売新聞』一九一四年二月九日）。あるいはそうした「院外青年」運動への積極的な関与が、かえって学内における活動の停滞を招いたのかもしれない。
- (38) 「本年度予餞兼校友演説大会」『学報』二二〇号、一九一三年六月、一四頁。
- (39) 尾崎士郎「早稲田大学雄弁会」前掲『五十周年記念出版 早稲田大学雄弁会』、一七頁。
- (40) 「討論会（三月十五日）」『学報』二七八号、一九一八年四月、二七頁。
- (41) 「懸賞雄弁会」『学報』二五〇号、一九一五年二月、二二頁など。
- (42) 「高等予科雄弁大会（十一月十一日）」『学報』二六九号、一九一七年七月、三〇頁。
- (43) 「本年度連合演説会派遣弁士」、同上、三一頁。
- (44) 「東西学生雄弁大会」『学報』二八一号、一九一八年七月、二二頁。
- (45) 「大隈伯後援会遊説部の活動」『新日本』五巻五号、一九一五年五月一日。
- (46) 桜井良樹解題「黒岩周六日記（大正三年四月～四年四月）」『紀尾井史学』四号、一九八四年二月、四四頁（一九一四年二月一日条）。黒岩は大隈系ジャーナリストの一人であり、大隈伯後援会あるいは丁未倶楽部の主張もそれとは同様のものであったと考えられる。
- (47) 「東洋会成る」『学報』二四九号、一九一五年一月、四四～四五頁。
- (48) 宮沢胤勇「擬国会時代の雄弁会」前掲『五十周年記念出版 早稲田大学雄弁会』、六頁。
- (49) 大正末期の雄弁会出席者である佐藤観次郎は、東洋会が「毎年二百円づつ雄弁会に補助をしてくれた」と回想している（『雄弁会時代の思い出 若き学生に与う』前掲『五十周年記念出版 早稲田大学雄弁会』、二八頁）。
- (50) 加藤山田「雄飛会」『学報』二四九号、一九一五年一月、四五頁。
- (51) 「寄宿舎梓会発会式」『学報』二五二号、一九一六年二月、一七頁。

- (52) 西岡前掲「東都学生界に、鳴りひびいた「壇下の雄弁」、一二―一三頁。
- (53) 前掲『早稲田大学百年史 第二巻』、八九七頁。
- (54) 尾崎士郎「天野学長の留任を強要す」『青年雄弁』二巻九号、一九一七年九月一日、一〇五頁。
- (55) 「早大寄宿舎の騒動」『東京朝日新聞』一九一六年三月一八日。
- (56) 内務省警保局『大正八年十一月十日現在 政治運動団体調』（国立国会図書館憲政資料室所蔵「小橋一太関係文書」所収）。外交総務として西岡竹次郎、会計主任として吉永半平、演説会準備主任として内藤隆の名前が挙がつており、雄弁会出席者がその主力をなしていたことが分かる。
- (57) 前掲『早稲田大学百年史 第二巻』、一一五三―一一五四頁。
- (58) 「雄弁会新春の活動」『学報』二七八号、一九一八年四月、二六頁。
- (59) この点については、「学生が廃止反対運動に立ち上ることのなかったのは、学苑直営の寄宿舎の存在理由が、この時期になると薄弱の度を強めていたのを物語るものである」（前掲『早稲田大学百年史 第二巻』、一一五四―一一五五頁）との指摘がある。
- (60) 「卒業生送別大演説会」『学報』二九三号、一九一九年七月、一一―一二頁。
- (61) 早大田村生「振はざる早大雄弁会」『青年雄弁』四巻一
号、一九一九年一月一日、七五頁。傍点引用者。
- (62) 「民人同盟会記事」『学報』二九三号、一九一九年七月、一三頁。
- (63) 民人同盟会及び建設者同盟については、建設者同盟史刊行委員会『早稲田大学建設者同盟の歴史——大正期のウ・ナロード運動』（日本社会党中央本部機関紙局、一九七九年）を参照。
- (64) 三宅正一追悼刊行会編『三宅正一の生涯』（恒文社、一九八三年）、四三頁。
- (65) 内政史研究会編『稲村隆一氏談話速記録』（同会、一九七五年）、一〇・一三頁。
- (66) 戸叶武によれば、「雄弁会に社会主義思想が入つて来たのは、森下（国雄）、中村（三之丞）、高橋（円三郎）氏等の時代から」であったという（『軍研騒動と大学擁護時代』前掲『五十周年記念出版 早稲田大学雄弁会』、二〇頁）。
- (67) 浅沼稻次郎「建設者同盟と雄弁会」前掲『五十周年記念出版 早稲田大学雄弁会』、一九頁。この回想については、「先日雄弁会の講演会があつたので一寸覗いて見た所が弁士諸君が文化主義とか人格主義とか云う^{（カスレ）}聴衆はやんやと猛烈に弥次りた^{（カスレ）}□た。併し少し赤色をおびた事を云ふと奇声を発するものは一人もない」（ケイ・エス生「雄弁会を見て面白い現象だ」『早稲田大学新聞』一九二二年二月五日。以下『大学新聞』と略記する）といった見聞記によつても裏づけられる。

- (68) M生「社会主義的色彩濃厚な雄弁会の現状」『大学新聞』一九三三年一月二五日。
- (69) 佐藤前掲「雄弁会時代の思い出」、二八頁。
- (70) 「雄弁会便り」『学報』三三二一、一九二二年一月、一六頁。
- (71) 「雄弁会々報」『学報』三三四四、一九二二年二月、一〇頁。
- (72) 大野国彦（青山学院弁論部）「雄弁連盟に就て」『雄弁』一卷一〇号、一九二〇年一〇月。
- (73) 平野学「人間機関車の誕生」浅沼追悼出版編集委員会編『慕進——人間機関車ヌマさんの記録』（日本社会党機関紙局、一九六三年九版、初版は一九六一年）、四六頁。
- (74) その詳細については、早稲田大学大学史編集所編『早稲田大学百年史 第三卷』（早稲田大学、一九八七年）第六編第二章「軍事研究団事件」を参照。なお市島謙吉は一九二三年五月二一日の日記に、同事件について、「案外穏かに局を結んだが、実は背後に何物かが潜んでゐて、新総長に対し先年の繰り返しを策してゐぬかと思はせた」と記している（『大正十二年五月下流起筆 小精廬雜載 五』早稲田大学図書館所蔵）。事件が高田の総長就任直前であつたということもあり、早稲田騒動を想起し、警戒心を強めていた大学当局の姿勢をよく物語つていゝといえよう。
- (75) その詳細については、前掲『早稲田大学百年史 第三卷』
- 第六編第三章「研究室蹂躪事件」を参照。
- (76) 六月二六日には大学擁護演説会を開催し（学問擁護の演説会『東京朝日新聞』一九三三年六月二五日）、夏季休暇には関西遊説を挙行している（『早大擁護を叫んで雄弁会が先づ奮起す』『読売新聞』同年七月二三日）。
- (77) 「沈黙せる雄弁会」『大学新聞』一九三三年十一月一五日。
- (78) 「紅花一輪の雄弁会」『大学新聞』一九二四年十一月九日。「新入生歓迎の弁論大会」同紙一九二五年四月三〇日。
- (79) 橋本登美三郎「中国遊説の想い出」前掲『五十周年記念出版 早稲田大学雄弁会』、二四頁。
- (80) 「万雷の拍手に迎えられ日露の提携を叫ぶ」『大学新聞』一九二四年六月四日。「新帰朝の鈴木文治氏を迎へ労働問題大講演会」同紙同年一月二二日。「婦人問題講演会」『読売新聞』一九二五年五月九日。
- (81) 「独立したる学生普選運動の発開式」『大学新聞』一九二四年一月二五日。
- (82) 同注六九。
- (83) 「大山郁夫教授早大雄弁会長を辞す」『読売新聞』一九二六年一月一六日。
- (84) その詳細については、前掲『早稲田大学百年史 第三卷』第六編第一章「大山事件」を参照。
- (85) 前掲『早稲田大学百年史 第三卷』、四〇五～四〇六頁。なお学生自治同盟は、「学内陰謀政治の徹底的排除」「教授・学生の政党加入の自由」「学級委員規約の改正（権限

の拡張)」「学生自治機関の確立」の四項目をその綱領に掲げていた。

(86) 佐藤前掲「雄弁会時代の思い出」、二七―二八頁。

(87) 前掲『早稲田大学百年史 第三卷』、四二二―四二三頁。

「学生ノ会ニ関スル規則」(一九二六年四月一日施行)により、公認の学生団体となるためには必ず教員を会長としなければならなかったが(四一〇頁)、もはや大学にはそれを引き受けようとする教員は現れなかったのである。